新春鼎談

医学生から見た平和活動

協会・保団連が加盟する反核医師の会には、学生部会があり、全国の医学生が集まっています。長崎大学医学部６年生の森 爽さんもその１人です。「医師は人間を無差別に殺傷する核兵器の被害は治すことができないのだから廃絶しかない」と訴え、活動してこられました。若者世代から見た社会、反核運動、医療界などについて、大いに語っていただきました（収録日は 2025 年 10 月 16 日）。

安保法制化や障がい者、民族差別などに触れて心揺れた高校時代

黒木　明けましておめでとうございます。今回、これまでの新春対談・鼎談で最年少のゲストになります。協会はもうすぐ 50 周年を迎え、保険医協会の活動も若い人たちが参加する組織でありたいと考えていますが、今日はよろしくお願いします。

本田　そうですね。森さんとは反核医師の会で一緒になり、「ずいぶん頼もしい医学生がいるもんだ」と感心しました。私なんか、いつ勉強したのか記憶がないです。麻雀ばかりしていたから（笑）。

森　高校の選択時は文系でしたので医師を目指す選択肢がありませんでした。結局、予備校生から長崎大学を目指しました。母が病院で医療事務をやっていたのでその影響もありますが、高校２年生の時の医師になるというか、社会活動に興味を得る出来事がありました。

黒木　医療とは関係がないことですか。

森　そうです。2015 年安倍政権の安保法制化です。「集団的自衛権の限定的な行使」が法制化され、日本の安全保障は大きな転換点を迎えました。反対デモが全国的に盛り上がり、多くの若者がそれらの運動に参加しました。

本田　ＳＥＡＬＤｓ（自由と民主主義のための学生緊急行動）ですね。若者の活動に刺激というか、影響を受けたのですか。

森　民主主義とは何かを深く考えるようになりました。当時、昔のようなヘルメットを被り、デモ行進するようなスタイルではなく、ラップを歌い、踊りながら活動し、声を挙げていました。このような活動に憧れましたし、将来のモチベーションになりました。医師になり、弱者に寄り添いながら、社会のために仕事をしたいと考えました。

黒木　2015 年の安保法制化反対運動の時は、これまでにないスタイルで運動が広まりました。そのほか、これまでどんな経験をされましたか。

森　大学に入学して、ある時、コロナ禍の盲ろう者の生活について、長崎新聞で読者の声が掲載されていました。目も見えないし耳も聞こえない人は、「人と人の間隔が２ｍ」と言われてもわからないとの指摘でした。母にそのことを話したら、「医師になればそういう人たちも診療する。皆、あんたと同じように生きてるわけじゃないんだよ」って言われて、盲ろう者の会を訪問して話を聞きました。妊娠体験で米俵をつけて、災害時の避難場所に行くようなこともしました。本田会長が属する反核医師の会で核兵器や被爆者の問題にも接することができました。東京でクルド難民の支援も手伝っています。

黒木　クルド難民の支援は、マスコミも取り上げないし、長崎ではあまり話題になりませんね。

森　クルド系武装組織「ＰＫＫ（クルド労働者党）」をトルコ政府がテロ組織と認定し、一般市民のクルド人も不当に拘束されたり、家族が行方不明になるなど、深刻な人権侵害・民族対立が起きています。大半は民主主義を求めて活動しているのですが、トルコ政府の弾圧を逃れて海外に亡命しています。トルコは親日国家なので日本へのビザ発行が容易です。しかし、日本がトルコからの難民申請を受け取ってしまうと、トルコには難民迫害の現実があると認めることになるので、そこには外交上の理由が生じています。クルド人の日本での生活は苦しく、差別されています。

ＳＮＳに流されやすい若者世代 経験を通じて本質に触れることが必要

黒木　実際に体験し、触れて事実を見てきたのですね。今、ＳＮＳなどでは、実際を知らないまま、相手を誹謗中傷することが日常茶飯事になっていますが、体験したことと、ＳＮＳの世界とでギャップを感じたことがありますか。

森　強く感じています。若者世代は流されてしまいます。ＳＮＳの中でその当事者に会うことはすごい難しいことです。似たようなことかもしれませんが、被爆者・被爆体験者の方の診療をしないと、本質が見えないように思います。私にはその経験がありません。

本田　元ＮＢＣ記者の関口達夫さんは被爆者問題に長く関わっていて、「被爆者は特別な人ではなくて、ごく普通の人ですよ」とよく言われていました。私の患者さんの半分は被爆者・被爆体験者です。本当に普通の人です。故・永井隆博士が救助活動した惨状は私も知りません。体験していないけど、被爆者・被爆体験者は身近な存在です。

黒木　私の地元は一定の年齢以上の方は原爆手帳を持っているのが当たり前の地域で、ことさら「原爆症」に触れる機会はありませんでした。被爆体験をあえて口にする必要もなかったと思われます。ただ、今は被爆者が少なくなってきて、「今のうちに語らないと」という人がいらっしゃいます。

本田　被爆者や被爆体験者が身近で当たり前だけど、県外や世界中には被爆者等と話した経験がない人がたくさんいます。昨年開催されたＩＰＰＮＷ世界大会でも同じです。被爆者等は見かけは他の人と同じでも、被爆体験をずっと引きずって生きてきていることがよくわかります。

森　引きずるものには、ＰＴＳＤが含まれているのですか。

本田　もちろんそれもありますが、全員ではないけど、「自分の病気は原爆のせいだ」とずっと思っている人もいます。その気持ちは理屈ではありません。長い間、その思いを抱えて生きてきた人に、あらたな戦争への危機など、むやみに刺激を与えてはいけないと思います。

森　福島原発事故による汚染はもう安全で「野菜も、魚も普通に食べられる」と、科学的な見解が示されていますが、そこに生まれ、生活してきた人、“一人の生活者の人生”という視点で見ると全く違う考え方になります。クルド人を知らなければ、「難民だ」「なんとなく怖い」とか、生活者としての視点が見えなくなり、ネット上の言説に流されてしまう状況があると感じています。

本田　冒頭、ＳＥＡＬＤｓの話がありましたが、「戦おうぜ」というメッセージは若者には受け入れやすいのでしょうか。前回の参議院選挙や高市首相誕生にも同じようなことを感じています。本質にかかわる議論はわざと避けて、別にターゲットを定めて攻撃するような…。

黒木　中高年以上はテレビ、若者はＳＮＳやYouTubeなので、世代によって触れているメディアが違います。若い世代は「テレビは本当のことを言わない」と思っているようです。ただし、他のメディアも偏向していないことはないですね。

森　そうだと思います。若者世代は、インターネット上のアルゴリズムによって、ユーザーが持つ興味や過去の行動に基づいて情報を自動的に選別し、似たような情報や意見に囲まれる現象、いわゆるフィルターバブルに犯されています。ある政党を検索するとその情報が更新されながら、ユーザーに届く仕組みですね。だから、一向に情報の幅が広がりません。

なので、反核医師の会の学生部会では「いっぽプロジェクト」に力を入れています。ＳＮＳにはＳＮＳで対抗しています。フィルターバブルの仕組みを使って、情報発信しています。“誘導する”というと語弊がありますが、「僕たちはこう考えている」ということを提案するツールとしてフィルターバブルを使うべきだと感じています。

中央に森 爽氏、向かって左は本田会長、右に黒木広報新聞部長

若手医療者団体「いっぽプロジェクト」 医師になっても、社会的な活動を継続したい

本田　「いっぽプロジェクト」は、黒木先生も初めて聞くと思うけど…。

森　現在私が代表を務める反核医師の会学生部会は 2008 年に反核医師の会から派生する形で発足しました。医学生ならではの特色を持って掲げられた当時の活動方針は、現在でも私たちの活動の根底に通じています。2023 年からは同じく反核医師の会から派生した若手医療者団体ＡＢＣ for Peace、通称「いっぽプロジェクト」と共同し、学習会や記念講演、現地フィールドワークにも取り組んでいます。さらに、核の問題を社会や人権の問題として捉えるため、「思想」「貧困」「歴史」の三つの分科会を新たに設け、それぞれの分科会テーマと核問題との関連を深掘りし、人道と理論の両側面から反核・平和の活動を続けています。

黒木　医学生や若い医師達の活動も大きな転換点を迎えているんですね。

森　今まさに大きな隆盛と変革を見せる学生部会ですが、現在活動の中心となっている医学生の中には学生部会企画で初めて広島や長崎に来た、という部員も少なくありません。現地学習や対面で聞いた被爆者の声が心に強く残り、部会加入を決めた学生もいます。オンラインが代替する時代にこうした対面学習を実施できるのも、ひとえに反核医師の会ならびに保険医協会の先生方のご支援とご協力のおかげです。この場を借りて学生部会を代表して感謝申し上げます。

黒木　会員は現役の医師ですか。

森　基本的には、反核医師の会に集まる若い医師が対象ですが、理念に賛同する医療職であれば誰でも歓迎です。看護師さんやソーシャルワーカーもいます。医学生も参加できます。

本田　活動するのはよいですが、組織は必ず、高齢化や世代交代をはじめ、継続が難しくなることに直面します。団体と若者をいかにつなぐかが課題です。若者が使うＳＮＳとの接点も作りにくいです。このあたりはどう考えていますか。

森　特効薬がないのが悩みなのですが、例えば、本田先生の「長崎の黒い雨」への取り組みにすごく刺激されました。しかし、長年蓄積されてきた知識や経験が、若者世代に十分に届いていません。「理論的に学びたい」と思っている若者はたくさんいます。それを求めている層は確実に存在しています。学生や若い世代には資金力がないし、機動力もありません。ベテランの経験をフィードバックすることが一番価値があると思っています。

本田　元毎日新聞記者でジャーナリストの小山美砂さんが、「フォールアウト ヴィクティム」（Fallout Victim：犠牲者）という言葉をＩＰＰＮＷのワークショップの中で使われました。広島・長崎の黒い雨も、カザフスタンも、ビキニも、福島も、みんなフォールアウト（放射性降下物：死の灰）による被害という点で「共通するものがあるね」という話をしていました。適切な表現だなと感じました。ギャップよりも、接点を大事にすべきですね。

黒木　福島の話が出ましたが、福島の子どもたちの甲状腺に関するデータはきちんと捉えていかないと、かえって誤解が生まれませんか。

本田　「全部が原発のせい」と思っている人が少なからず存在します。医師の中にもいます。私は福島の甲状腺異常の全部が原発事故が原因ではなく、かといって全部が「影響なし」ではないと考えます。しかし、科学的に話を進めても、反発する人がいます。その結果、危険な目にさらされる可能性があります。

このような風潮は戦争に向かう動きと重なる感じがあります。戦争が若い世代にとっても身近に感じられるようになっていませんか。

森　僕らの世代では、戦争と直接結びつけて 考える人は少ないと思います。それよりも、「生活が苦しい」という実感が強く、「外国人が優遇されている」「外国人を憎む」というよりも、自分たちの生活が苦しいことに結びついているだけだと思います。

本田　「戦争や核兵器反対」を言われても、あまり自分ごととして受け止められないということですね。

森　はい、そうです。「核兵器廃絶」はＳＮＳでは盛り上がりませんから…。

黒木　外国人排斥や移民受け入れ反対などの声は、若者世代に比較的受け入れられやすい環境なのでしょうか。

森　それは雰囲気の問題です。歴史的に見れば、貧困は戦争に利用されてきました。しかし、若い世代は、戦争をしたいわけではありません。

本田　核兵器禁止条約（ＴＰＮＷ）第３回締約国会議でニューヨークに行ってみて、アメリカの若者はどうでしたか。

森　ユース会議の中で、被爆者が体験を語り終えた後、「『今日の聞き手は明日の話し手』ですから、皆さんどうぞ持ち帰って自分たちのこの被爆体験を人に伝えて、言葉の力で世界の平和を作っていって下さい」と言われ、200 人ぐらいの若者が静まりかえりました。「次は自分たちなんだ」と感じて沈黙したのが印象的でした。本当に希望を感じました。一方、本会議はコロナ禍で日本での報道は低調でした。覇権主義的な国家間の議論では解決しないし、その議論すら日本が参加しないことに憤りを感じます。新しい政権になりましたが参加はしないでしょうね。

被爆国であるのにこのような態度ですし、県外出身の大学生は原爆の日を正確に答えられる人が少なく、危険な状況です。国民の意識にも問題があります。

本田　日本は南京大虐殺もなかったことに軌道修正するような国ですから、危ない方向に進んでいると言っても過言ではありません。

黒木　例えば核兵器は恐ろしいから平和に寄与しているという考えがあるのと同じように、日本人もいざと言う時は怖いと思われているうちは相手も攻撃しにくいのじゃないでしょうか。それを無かったことにしてしまうと、昔の兵隊さんの苦労が報われない気がします。

若者世代から見た今の医療現場

本田　医師になったら、谷間の世代になりますが、それを打開していくような解決策を考えていますか。

森　ドイツやアメリカから来た大学生も、「学生時代はこうやって社会活動に専念できるけど医師になると難しい。でも、少なくとも自分たちは繋がり続けよう」と言って連絡先を交換しました。若者世代の運動・活動の継続性は世界共通の課題です。医学生時代の思いを医療現場で活かせることが、よりよい医療の実践につながると思います。

本田　医師の過労死は後を絶ちません。私が医師に成り立ての頃は１日 20 時間働いて４時間寝るような時代です。そういうのが当たり前みたいな時代でしたが、医師の就労環境についてどのように見ていますか。

森　実習先の病院は厳格に労働時間を守っていました。若い医師は、強制的に自分の選択権がない状況で仕事をさせられることに抵抗します。自分がやりたいことがあって、自分から残るという環境は健全だと思います。一方、医療費削減が進む中、医師の残業代が払えない病院があり、病院経営が健全でないことがリアルすぎます。だから、中間管理職の医師に過重な負担があるのではないかと感じています。

黒木　今、女性医師・歯科医師が増えています。歯学部は半分以上は女性です。女性が働きやすくなることが大切だと思います。

森　私の学年は６対４です。今は半々です。女性は一番研鑽しないといけない時期に結婚・出産という大きなライフイベントを迎えます。このシステムを変えないと、女性の就労も維持できなくなります。家に帰ったら、妻がいて、子供がいて、もうご飯があって当然という価値観では対応できない時代が来ています。

黒木　私が子供の頃に安保闘争がありましたが、当時、学生運動にいそしんだ若者が、社会に出て「あれは若気の至りだった」という総括で済んでいるのが不思議な気がします。

森　恐らく、自分の視点が会社とか、組織になるのではないかと思います。私も、今は学生の視点で「戦争は絶対ダメだ」と言っていますけど、一旦就職したりすると、「いやいや、そんなこと言ったって核兵器は日本の国防のために必要だ」と考え始めるかもしれません。だから、この若くて時間がある時期に、何を言っても許される時期に、社会の中でいろんな人の人生を見ないといけないと思っています。今日は本当にありがとうございました。

（本田・黒木）　今度は谷間の世代になってからの話しを聞かせてください。国試をパスして、お互い医療者として、より良い医療のために働いていけたらいいですね。私たちも少し若返ったように感じています。

ＡＢＣ for Peace
（いっぽプロジェクト）
はこちらから